

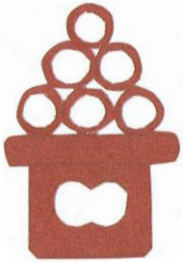
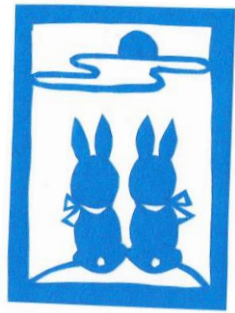
だいいく通信 第五十五号 「秋の号」

いあつて

今年の夏は、統計をとりはじめてから最も暑い夏になるとのことでした。東京でも、三十五度を超える「猛暑日」は最多、三十度以上の「真夏日」連続日数も記録を更新したそうです。厳しい暑さで、体調を崩された方もいらっしゃるのではないのでしょうか。この暑さは、まだしばらく続きそうです。どうぞくれぐれもご自愛くださいませ。

社報「だいいく通信」第五十五号をお届けします。

今回の内容は、神社に関する豆知識をお伝えする「お宮あれこれ」、オリジナル・キャラクターたちが活躍する連載まんがなどです。お楽しみいただければ幸いです。



大國神社の今

○お正月の準備など

大変気が早い話ではありますが、すでにお正月の準備が始まっています。新しい授与品のご用意などを進めているところです。詳細はまた改めてお知らせいたします。

なお、今年初めからお出ししております「仕事守」がご好評をいただいております。日々ご無事でお勤めいただけますようにとお願いを込めて調製しました。お参りの際はぜひご覧いただければと存じます。



お宮あれこれ 「いのる」「ねがう」「おがむ」の話

「家族のみんなが健康で過ごせますように」「希望の学校に合格しますように」「商売がうまくいきますように」……ご神前でお詣りをする際、わたくしたちはさまざまなお祈りを祈ったり、願ったりします。今回はこの「祈る」「願う」、そして「拝む」ということばについてお話しましょう。

まず、「祈る」についてみていきます。「いのる」はもともと「いのる」という二つの部分からなることばだそうです。「いのる」は「神聖、斎」の意味、「のる」は「宣る」の意味だとされます（『日本国語大辞典』）。



「齋」は「ゆ」と読み、「神聖」であること。清浄であること」をあらわします。助詞「つ」を伴って「ゆつ磐群（いわむら）」（神聖な岩石の群れ。清浄な岩々）のように使ったり、「ゆ庭」「ゆ鍬（くわ）」のように直接に名詞の前につけて、その物が神事に関する物であることをあらわしたりします。「い」も同じ意味をあらわします。「万葉集」の例を挙げておきましょう。



「ちはやぶる神の伊（イ）垣も
こえぬべし今はわが名の惜しげくもなし」（万葉集・二六六
三）

「のる」は「言う、述べる」という意味のことばです。古く奈良時代から用いられており、「延喜式祝詞」に「天つ祝詞の太祝詞事を宣（の）れ」という表現が登場します。現代では使われなくなったことばですが、「名のる」という表現の中に残っています。「のる」は単純に口に出して言うという意味ではなく、呪力を持った発言、重要な意味を持った発言、ふつうは言ってはならないことを口にすることをあらわしています。「のろふ（呪）」ということばも「のる」がもとになっています。ちなみに熊本の方言では「いのる」が「のろう」の意味をあらわすところもあるそうです。

ただ、「のる」と「いのる」はどちらが先にできたことばなのかははっきりしていません。いずれにせよ、「いの

る」は「ことばを口に出して、神に福を求める」という意味をあらわします。

また、「万葉集」には次の例があります。

「天地（あめつし）のいづれの神を以乃良（イノラ）ばか愛（うつく）し母にまた言問はむ」（四三九二）

ここでは「神を祈る」と表現しています。ここから、「いのる」の本来の意味は「神の名を口にする」ことだったと考えられます。その後、平安時代には、「神に」という形で用いられ、神に「対して」願望が叶うように求めるといった意味を表わすようになりました。ずっと時代の下った十七世紀初めの「日葡辞書」には次のように書かれており、「くをいのる」「くいにいのる」の両方が使われていたことがわかります。

「Inori, u, otta（イノル）〈訳〉祈禱する。ホトケニ、または、ホトケヲ inoru（イノル）」

ちなみに、「いのる」と近い意味をあらわすことばとして

「祈（の）む」があります。奈良時代の「日本書紀」（崇神一〇年九月（北野本訓））の例を挙げておきます。

「不得免（まぬかるまじきこと）を知（し）りて、叩頭（たたく）て曰はく『我君（あかきみ）』といふ〈略〉〈叩頭（たたくかうへ）此をば洒務（ノム）と云ふ〉」

ここからわかるように「のむ」は「頭を下げてこいねがう」という意味をあらわしています。頭を下げる、ひれ伏すなどの動作に注目した表現だと言えます。祝詞では「乞い祈みまつる」という言い方がよく出てきます。

次に「ねがう」についてです。このことばはもともと「ねぐ」という動詞に継続や反復をあらわす助動詞「ふ」がついたものです。

「ねぐ」は「他者の心を慰めいたわる」という意味で、自分よりも目上に対して使うと「願う」意味、目下に対して使うと「ねぎらう」という意味になったとされています（「ねぎらう」も、「ねぐ」がもとになったことばです）。神社に複数の神職がいる際、一番上の神職が「宮司」で、その下の神職を「禰宜（ねぎ）」と言います。この「禰宜」ということばは「ねぐ」からきているといわれています。

このような「ねぐ」がもとになり、「ねがう（ねがふ）」は「神仏に望むことを請い求める」という意味になります。「ねがう」もまた古い言葉で「万葉集」の大友家持の歌にもみられます。

「泡沫（みつぼ）なす仮（か）れる身そとは知れれどもなほし禰我比（ネガヒ）つ千歳の命を」（四四七〇）

最後に「拝む」についてお話しします。「拝む」は、古い時代には「おろがむ」という形でした。「日本書紀」に次の例があります。

「畏（かしこ）みて仕へ奉（まつ）らむ鳥呂餓瀨（オロガミ）て仕へ奉らむ」（推古二〇年正月・歌謡）

祝詞ではよく「おろがむ」を使います。「おろがむ」の語源は「折れ屈む」だという説があります。つまり、身体を折り曲げてお辞儀をするという動作をあらわしていたということです。先にお話しした「のむ」と同じく、動作に注目した表現だといえるでしょう。この「おろがむ」が縮まって「おがむ」になったとされています。神仏を「拝む」ことをあらわす、最も古い例は次の「土左日記」の例だとされます。



「ひとにとへば『八幡宮（やはたのみや）』といふ。これを聞きて喜びて、人々をかみたてまつる」（承平五年二月一日）

「いのる」「ねがう」「おがむ」はいずれも叶えたいと思っていることをご神前で神様にお伝えしようとするという意味をあらわします。ただ、以上お話ししてきました通り、三つのことばには少しづつ違いがあることがわかります。「いのる」は「ことばに出して伝える」、「ねがう」は「神様の心を慰めいたわることで伝える」、「おがむ」は「身体を折り曲げ、深くお辞儀をすることで伝える」というふうにとめることができません。いずれも、神様に対する古代の人々の姿勢がよくあらわれたことばだといえるでしょう。

参考文献 「ジャパンナレッジ利用」 『日本国語大辞典』（小学館）

祭礼・祈禱などの行事

○次回甲子祭

令和五年十一月二日（木） 午前五時～正午

○開運千人講祈禱祭 毎月一日 午前六時～正午まで

○諸祈祷受付 商売繁盛祈願、心願成就祈願、厄除け、お宮参りなど、随時祈禱を行なっております。

○お祓いのお申し込み・お問い合わせなどは以下の電話番号もしくはメールにてお願いいたします。

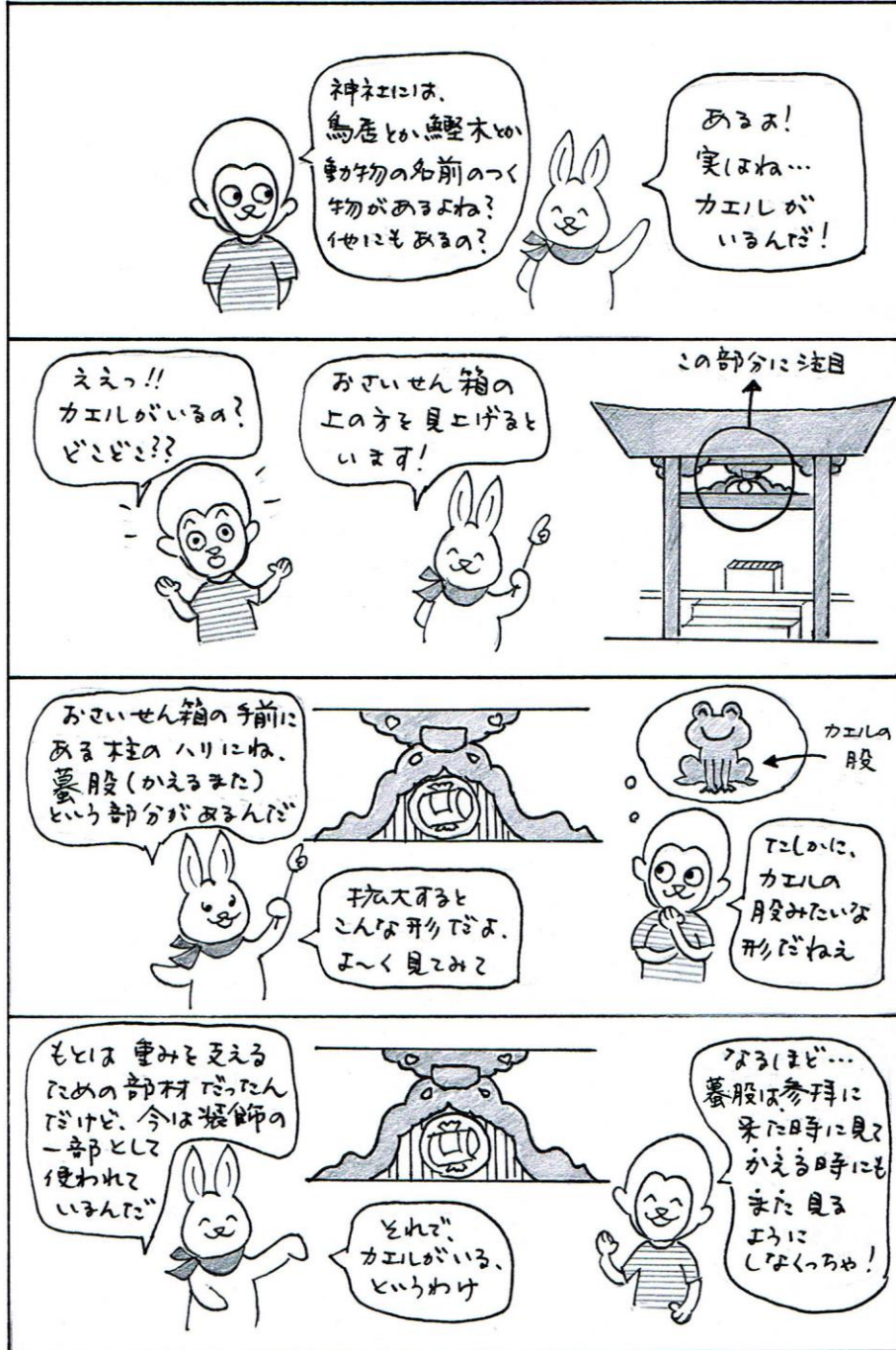
不在の場合は、恐れ入りますが、留守番電話のメッセージのあとで、お名前・お電話番号・ご用件をお話しく下さい。のちほどこちらからご連絡いたします。



(連載まんが)

大吉うさぎ ～神社豆知識 その15～

くまこまち 作



次号発行予定

「だいこく通信第五十五号」、いかがでしたか。次号「冬の号」

〈お問い合わせ・お申し込み〉

電話

〇三―三九一八一―七九三〇

携帯

〇八〇―一九八七―八七二六

eメール

daikokujinja@gmail.com

は、令和五年十一月二日甲子祭に発行予定です。

「だいこく通信」第五十五号 令和五年九月三日発行

編集・発行 大國神社社務所

〒一七〇―〇〇〇三 東京都豊島区駒込三―二―十一

<http://www.daikokujinja.org>

